

「個人主義・集団主義という世界観が、企業のリーダーにおける、長期育成主義的行動
及び短期育成主義的行動に与える影響についての研究」

慶應義塾大学 経済学部
大垣昌夫研究会
リーダー行動研究グループ
胡 文叶 伊吹 建
小田 紘也 藤 翔太郎

2011年2月28日
(2011年8月26日改訂)

1. はじめに

行動経済学は、伝統的な経済学とは異なり、完全に合理的に行動する「経済人」を仮定に置かず、より現実の人間の心理や行動の特徴を捉えた学問で、近年新しい理論を幅広く展開している。そんな行動経済学の中でも、主に「ある経済主体の世界観が、その経済主体の経済行動に与える影響」を私達の研究会では研究している。

今回私達が研究したテーマは、この「世界観が経済行動に及ぼす影響」の中でも「個人主義・集団主義という世界観がリーダー行動に与える影響」を調べると言うものである。この研究トピックがなぜ重要だと考えたかについて、まずは「個人主義・集団主義」というものを考えることの重要性について述べたい。私たちは「個人主義・集団主義」という考え方は、「世界観の根底になっているコアのようなもの」ではないかと考えている。世界の人々はそれぞれ異なった世界観を持っている。これは一人一人違うものだが、大まかにいえば国や地域、所属する宗教によって大まかに別れていると言うことができるだろう。さらに、その世界観を一つ一つ見ていけば異なる世界観の中にも共通する軸というものがでてくるはずである。このような世界観を形成している軸の一つとして個人主義・集団主義というものがあるのではないかと私達は考えた。つまり、全ての人、文化は個人主義・集団主義という軸の上に属しており、その軸の上で分類することが可能だろうと考えたのである。このように世界観の軸となっている、個人主義・集団主義は、その人の世界観を測る上で非常に便利なのではないだろうかと考えたことが、この研究を始めた一つの大きな理由となっている。

次に「リーダー行動」というものについて考えていきたい。リーダー行動とひとえに言ってもその内容は幅広いだろう。何故ならばリーダーが取る行動は多種多様で極端な話、この世にいるリーダー全ての数だけリーダーの行動が存在するためである。さらにリーダーと言っても様々なリーダーが存在する。政治、企業、部活、サークル等、所属する団体の性格によってその行動は大きく異なってくる事が考えられる。そこで今回私達は企業のリーダーに焦点を絞り、その行動の中でも、リーダーの「短期結果主義的行動と長期育成主義的行動」というものに着目することにした。何故そのようにリーダー行動の中でも行動を絞ったかと言うと、同一のアンケートで様々なリーダー行動を同時に測ることは非常に難しく、またそれらの様々なリーダー行動を同時に調べようとするとアンケートの質問数が膨大にならざるを得ず、解答者数を確保することが難しいという点が挙げられる他、異なる性質を聞いている質問の間に予期しない関係が生まれてしまったり、私たちの意図とは異なる方向に質問を捉えられてしまう可能性が高くなる可能性があったためである。よって今回はある程度行動を絞った研究テーマを研究することで、正確なデータを集め、分析を行いたいと考えた。

ここで改めて正確な研究テーマを呈示しておくならば、私達が研究したテーマは「個人主義・集団主義という世界観がリーダーの短期結果主義的行動と長期育成主義的行動に及ぼす影響」ということになる。近年日本では個人主義化が進んでいると言われていたが、そういった中で就職活動をしている学生の間では、「能力主義・結果主義の考え方が強くて高賃金傾向のある外資系企業に人気が集まる」という傾向が存在していると思われる。これらの動向から私たちは、集団主義的な人ほど、長期育成主義的なリーダー行動を好み、個人主義的な人ほど短期結果主義的なリーダー行動を好む傾向があるのではないかと考えた。

この研究の結果を反映することによって、企業の経営を行うリーダーは今後より一層進むであろう企業の多国籍化の中でその土地々々にあった企業経営を行うことが可能になるのではないかと私達は考えている。例えば、仮に集団主義の国で長期育成主義的なリーダー行動が求められているのであれば、そういった考えを持つ人を現地に派遣し現地で指揮をとってもらうことで、より従業員の能力を引き出したり、モチベーションを上げたりすることが可能になるのではないだろうか。また、一方の個人主義の国では短期結果主義的なリーダー行動が好まれているのであれば、そういった考えを持っている人をリーダーとして派遣する、という風に人事を工夫することで企業の経営を改善し、より効率的な経営が可能になると考えている。また、極端にどちらかによつていない場合であっても、経営を行う上である程度参考にすることができ、経営を見直す際の1つの指標になるのではないだろうかと私たちは考えている。

2. 研究方法

今回の研究では、まず、世界観とリーダー行動についてのアンケート調査を行い、その調査結果を「回帰分析」という統計的手法によって分析することで「実際に世界観がリーダー行動に寄与しているかどうか」を観察するという研究の形を採用した。以降、研究におけるそれぞれの過程についての詳細を記述していく。

2.1. 説明変数・被説明変数の設定、アンケート作成

まず、研究の過程で回帰分析を用いるため、説明変数を「個人主義的世界観を持つのか、集団主義的世界観を持つのか」と決定し、被説明変数を「短期結果主義的リーダー行動をとるのか、長期育成主義的リーダー行動をとるのか」と決定した。そして、アンケートに掲載する「それぞれの変数についての質問」の作成を行った。

アンケートに掲載された被説明変数の質問は「表 1：被説明質問群」（次ページに掲載）内の 4 問である。4 つの質問ともに、「企業における 1 つの状況の下で①と②のどちらを選択するか」という設問に対して「1：①を選択する」、「2：どちらかといえば①を選択する」、「3：どちらでもよい・わからない」、「4：どちらかといえば②を選択する」、「5：②を選択する」の 5 つの選択肢の中から 1 つを選択して回答するという形式のものである。問 1、問 3、問 4 の質問では、回答者が①寄りの選択（「1」もしくは「2」の選択肢を選択）をすると長期育成主義的行動の選択であり、②寄りの選択（「4」もしくは「5」の選択肢を選択）をすると短期結果主義的行動の選択となっている。一方で問 2 の質問では、①寄りの選択が短期結果主義的行動の選択、②寄りの選択が長期育成主義的行動の選択となっている。

また、説明変数の質問は「表 2：説明質問群」（5 ページに掲載）内の 6 問である。6 問ともに、回答者がそれぞれの質問に対して提示された 5 つの選択肢から自分の考えに近い選択肢を 1 つ選ぶという形式のものである。問 1 と問 5 においては、回答者が「1」もしくは「2」の選択肢を選ぶと個人主義寄りの回答となり、「4」もしくは「5」の選択肢を選ぶと個人主義寄りの回答となる。一方、問 2 から問 4、問 6 においては、回答者が「1」もしくは「2」の選択肢を選ぶと個人主義寄りの回答となり、「4」もしくは「5」の選択肢を選ぶと個人主義寄りの回答となる。

表 1 : 被説明変数質問群

・問 1 (y1)

あなたは自社に優秀な人材を求めています。あなたは①と②のどちらを選択しますか？

- ① : 新卒だが将来を期待された若手を採用
- ② : 実績のあるエキスパートを中途採用

・問 2 (y2)

あなたは今 2 つのプロジェクトのどちらかを選択しなければなりません。あなたは①と②のどちらを選択しますか？

- ① : 将来性は高くないが、短期的には大きな利益になる「短期集中型」プロジェクト
- ② : 短期的に見ると利益になるか分からないが、将来性が高い「長期持続型」プロジェクト

・問 3 (y3)

あなたは今ある取引で得た利益を次のどちらかに追加で投資しようと考えています。あなたは①と②のどちらを選択しますか？

- ① : 自社の技術力を向上させるための研究
- ② : 現在好調な商品の追加生産

・問 4 (y4)

新しいプロジェクトをやるにあたり、そのプロジェクトグループのリーダーを選出することになりました。あなたは①と②のどちらの人を選択しますか。

- ① : グループをじっくり育成するタイプ
- ② : プロジェクトの成果を優先するタイプ

表 2：説明変数質問群

・問 1 (x1)

仲間と様々な事(趣味や体験 etc.)を共有するというのが好きですか？

(選択肢)

- 1：好きである 2：どちらかという好きである 3：どちらとも言えない
4：どちらかという好きではない 5：好きではない

・問 2 (x2)

人は相互依存的ではなく、他者とは独立して自分の人生を歩むべきだと思いますか？

(選択肢)

- 1：そう思う 2：どちらかというと思う 3：どちらとも言えない
4：どちらかというとは思わない 5：そうは思わない

・問 3 (x3)

あなたは秘密が多いですか？

(選択肢)

- 1：多い 2：どちらかという多い 3：どちらとも言えない
4：どちらかという少ない 5：少ない

・問 4 (x4)

目立つことは好きですか？

(選択肢)

- 1：好きである 2：どちらかという好きである 3：どちらとも言えない
4：どちらかという好きではない 5：好きではない

・問 5 (x5)

「家族や友人と過ごす時間」と「1人で過ごす時間」、あなたはどちらが大切ですか？

(選択肢)

- 1：「家族や友人と過ごす時間」 2：どちらかという「家族や友人と過ごす時間」
3：どちらとも言えない 4：どちらかという「1人で過ごす時間」
5：「1人で過ごす時間」

・問 6 (x6)

「自分にとって、勝ち負けはとても重要なことである」と思いますか？

(選択肢)

- 1：「そう思う」 2：どちらかという「そう思う」 3：どちらとも言えない
4：どちらかという「そう思わない」 5：「そう思わない」

2.2. 学生へのアンケート調査

今回私たちはアンケート調査にあたり、将来的に「企業のリーダー」というポジションに就く可能性があり、「リーダーの卵」と呼ぶことのできる存在である「学生」を調査対象とした。そして、「紙媒体の配布によるデータ収集」、「インターネットを通してのデータ収集」という二つの方法を主に使って回答データの収集を行った。紙媒体の配布による収集は、2010年12月8日に開催された「慶應義塾大学経済学部大垣昌夫研究会オープンゼミ」に参加した大学2年生に対して実際にアンケートを配布して行った。また、インターネットを通しての収集は、友人にインターネットサイト「アンケートツクレー」(<http://eng-maker.com/>)によって作成したアンケートサイトに直接アクセスしてもらって回答してもらおうという方法、中国語に翻訳したアンケートを中国にいる友人にインターネット経由で回答してもらおうという方法で行った。こうした方法によって、私たちは最終的に日本と中国の学生計179人分の研究用回答データを得た。

2.3. 分析方法

分析に先立って、両変数における質問は「“A”なのか、それとも“B”なのか」という「質的な事柄」を聞く目的で作成した質問であることから、回答データの「ダミー変数」への変換を行った。説明変数の質問の場合は集団主義寄りの回答ならば「1」、個人主義寄りの回答ならば「0」と変換し、被説明変数の質問の場合は長期育成主義的行動寄りの回答ならば「1」、短期結果主義的行動寄りの回答ならば「0」と変換した。そして、変換したデータを基に、被説明変数がダミー変数であるので「プロビット」という分析手法を用いて重回帰分析を行った。

3. 分析結果

重回帰分析の結果をまとめたものが以下の表 3 である。

表 3：重回帰分析結果

		被説明変数											
		y1			y2			y3			y4		
		相関係数	標準誤差	評価	相関係数	標準誤差	評価	相関係数	標準誤差	評価	相関係数	標準誤差	評価
説明 変数	x1	-0.54	0.505		-0.17	0.496		0.751	0.476		-0.855	0.515	
	x2	0.624	0.214	★★★	0.462	0.48	★★	0.176	0.23		0.198	0.212	★
	x3	0.17	0.209		-0.026	0.218		0.086	0.225		-0.057	0.208	
	x4	-0.084	0.217		-0.138	0.217		-0.048	0.231		-0.263	0.214	
	x5	-0.145	0.288		0.185	0.224		-0.399	0.327		0.216	0.282	
	x6	0.325	0.215		0.391	0.285	★	0.376	0.233		0.539	0.212	★★

(表 3 の注)

評価について、「有意水準 10%」で有意な場合は「★」、「有意水準 5%」で有意な場合は「★★」、
「有意水準 1%」で有意な場合は「★★★」と表記

結果の詳細については、次項の「4. 考察」内で合わせて説明する。

4. 考察

まず、表 3 から被説明変数 y2 と説明変数 x2、x6 との間に有意な関係があることが確認できる。また同時に、被説明変数 y4 と被説明変数 x2、x6 との間に有意な関係があることも確認できる。この分析結果は、「人は相互依存的であるべき」という考えを持つ人、勝ち負けを重要視しない人（集団主義的世界観を持つ人）が「長期育成主義的なリーダー行動」を選択し、逆に「人は独立して生きるべき」という考えを持つ人・勝ち負けを重要視する人（個人主義的世界観を持つ人）が「短期結果主義的なリーダー行動」を選択するという私たちが想定した因果関係と合致している。ここで、この分析結果が私たちの想定した因果関係を正確に捉えていない可能性について見てみると、逆向きの因果関係や除外されている重要な変数はまず存在していないのではないかと考えられる。このことから、今回の研究における分析結果が私たちの想定した因果関係を正しく捉えていない可能性は低いと考えられる。

5. 結論

この項では、考察の内容を踏まえた上、結論を述べる。

まず、集団主義と個人主義の定義を改めて定義する。集団主義的な世界観を持つ人は、人と人の関係を「相互依存」と認識し、自分の存在を集団の一部であり、社会とかなり関連した存在であると捉える特徴がある。それ故、同一性を追求し、地位において同等であるべきことを強調し、目立つことや勝つことに対する関心が低い。一方、個人主義的な世界観人は、人の存在を「独立した存在」と認識し、自分と他人は関わっていません、社会ともまったく関連していない存在であると捉える特徴がある。そのため、同一性を追求したり関係性を維持したりするより、合理的な判断を重視し、独立を求め、目立つことや勝つことを好むのである。ここで、もう一度考察の部分を見てみる。「人は相互依存的であるべき」と「勝ち負けは関係ない」と思う人は、集団主義の定義と一致する。このタイプのリーダーは「新卒採用に積極的」、「プロジェクトをじっくり育成」、「長期持続型プロジェクトを好む」という行動を取る傾向がある。つまり、「集団主義的な人は、長期育成を重視した行動をとる」と言える。一方、「人は独立して人生を歩むべき」と「勝ち負けは重要」と思う人は個人主義の定義と一致する。このタイプのリーダーは「エキスパート採用に積極的」、「プロジェクトの成果を優先」、「短期集中型プロジェクトを好む」という行動をとる傾向が得られた。つまり、「個人主義的な人は、短期結果を重視した行動をとる」と言える。上述した部分をまとめると、「集団主義的な人ほど長期育成主義的なリーダー行動を好み、個人主義的な人ほど短期結果主義的なリーダー行動を好む」との結論が出ると言うことができる。